

## 第 3 篇

(3)

海員学校生徒の身体発育状況

この報告は、昭和 27 年 10 月入学、同 28 年 9 月卒業の海員学校生徒について、一カ年間の身体発育状況を考察したものである。

年齢を異にし、かつ質的に異なる項目について、年間発育の程度を比較する場合には、共通の規準により、しかも同一のスケールに換算して比較する方が便宜であるので、ここでは昭和 25 年及び昭和 26 年の厚生省国民栄養調査成績による国民平均値から、標準年間発育量を求め(表 3-4)、それに対する比率をもつてあらわすことにした。即ち 100% は国民的標準発育量と同等の発育を示していることになる。但しこの場合測定時期の相違にもとづく変動は考慮されていないが、このような方法によつて、昭和 27 年 10 月入学した各海員学校生徒の年間発育を集計した結果を観察すると次のような所見が得られると思う。

表 3-4

国民平均年間増育(男子) 単位

項目 \ 年齢	16~17	17~18	18~19	19~20
身長 (cm)	2.25	1.20	0.50	0.55
体重 (kg)	2.91	1.87	1.05	0.70
胸囲 (cm)	2.20	1.45	0.95	0.60

厚生省国民栄養調査成績より

1. 先づ入学時の生徒の体格を国民平均値に比較してみると、図 3-16~18 に見られるように、全体として海員学校の良好であることが認められ、多数の志望者の中から選抜された結果であろう。
2. 年間の発育量を項目別にみると、全体として体重胸囲は標準増育量より大なる学校が多いが、身長は標準増育量より小なる学校が多い。これについては身長は入学時既に相当大なること(図 3-16 及び 3-19)、同じく 1 年間でも測定時期にずれのあること鍛錬的要素を含む生活は長育よりも幅厚育に対する影響が、より著明であること等が考えられる。
3. 科別比較では概して航海科より機関科の方が発育率が大なる傾向をみる。これには年長者の標準増育量は小さく、僅かの変動も年長者には大きく現われるのが一般であるが、機関科は航海科より年齢が高い関係も考えて見ねばならぬ。
4. 学校別比較については、個人の増育量の分散が示されていないので、学校差の有意性を検定することは出来ないが、概括的傾向としては高浜、児島は劣っている関係にある。但し身長については、宮古、高浜は入学時既に高く、平均的に発育の余地が少なくなつており、これに対して門司、唐津の場合は入学時の身長は低く、発育の余地がより多く残されていた事情もある。
5. 次に項目別に入学時の発育と年間増育量との関係を見ると、図 3-20 に示す通りで、身長、胸囲は入学時に小さいものほど、従つて又年齢の低いほど年間増育量は大きい傾向にあるが、体重はこの点明かでない。このことは体重は栄養摂取と鍛錬の如何との関係により、種々に変り得ることを意味するようにも考えられる。

図 3-16 入学時の身長

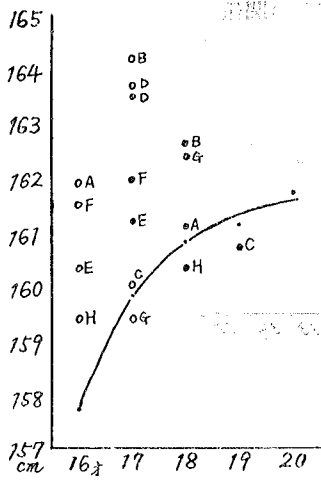


図 3-17 入学時の体重

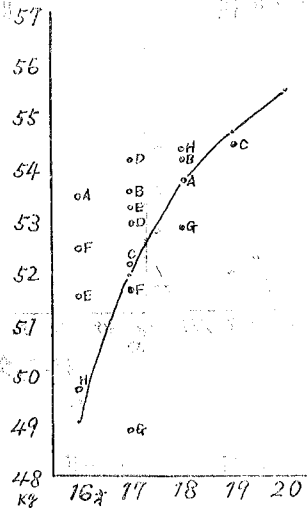


図 3-18 入学時の胸囲

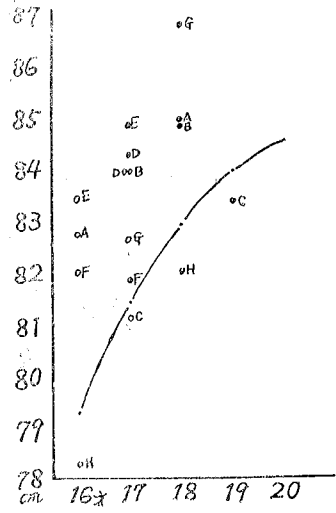


図 3-19 海員学校生徒年間増育量の国民標準増育量に対する%

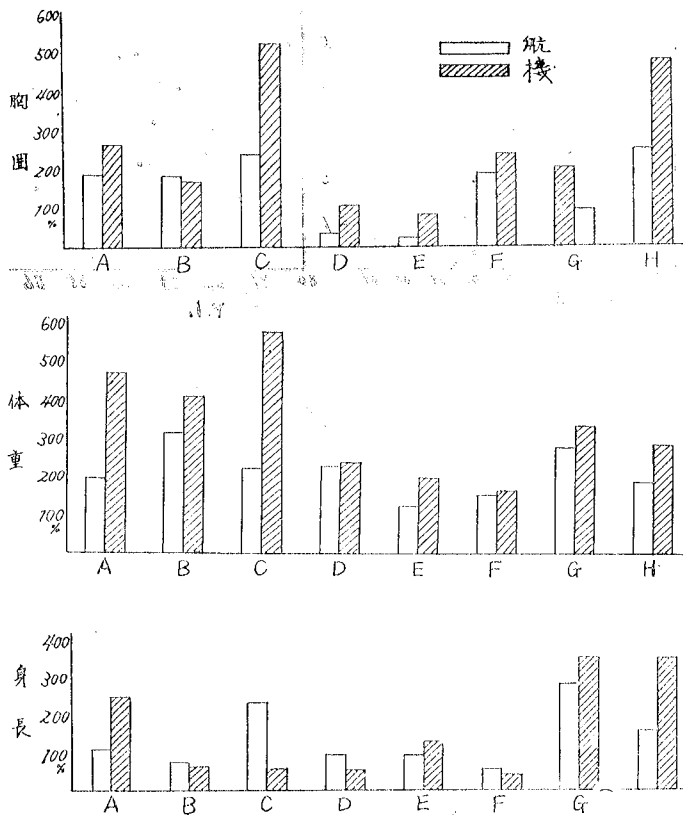


図 3-20 入学時の身長と年間増育との関係

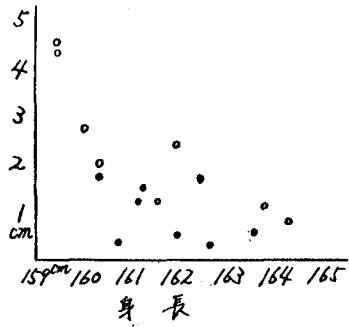
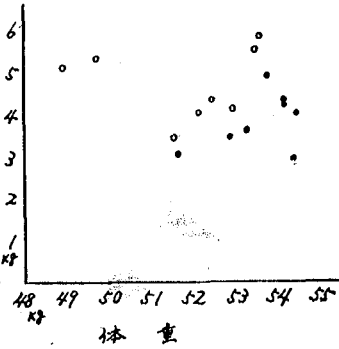


図 3-21 入学時の体重と年間増育との関係



○…N ●…E

図 3-22 入学時の胸囲と年間増育との関係

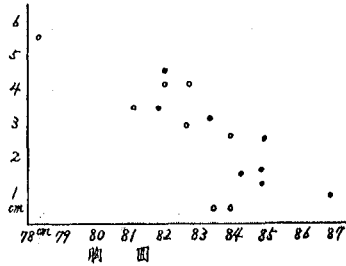


図 3-23 入学時のベルベック指数と年間増育との関係

